

佐渡の庚申信仰

——相川町を事例にして——

新 保 哲*

Kōshin Worship Seen in Aikawa, Sado

Satoru Shimbo

要 旨 佐渡における庚申講をはじめその他の講について、その実態はどの様に庶民の信仰的講となっ
て行われていたのかを紹介してみたい。たとえば、佐渡では甲子講、庚待講、二夜待講、三夜待講、己
待講、七日講、十二夜講、十三日講、二十一日(真言)講、十四日(真言)講などがあった。

以上の各講を、『佐渡年中行事』(柳田国男, 中山徳太郎・青木重考共編, 高志書院, 平成十一年)と
『新潟県史』(資料編23 民俗・文化財二 民俗編11, 編集発行・新潟県, 昭和五十九年)と『佐渡
相川の歴史』(資料集八, 「相川の民俗」, 相川町史編纂委員会, 昭和六十一年)を根本資料として導入
部を論述してから、本題の庚申講の実体とその諸特色を相川に焦点を絞って考察してみたい

キーワード 庚申講 講中 オカノエさん

—

甲(子)講

- 甲講は甲子〔補記：干支^{えと}の一つで、キノエネをさす。カッシともいう〕の日に講員が集まって、
大国主命を祀り、大祓を読む所、仏式の所などある(徳和)。
- 甲子祭は年六回 講中の者が当たり日に祝う(松崎・大崎), 春秋二期甲子の日に祝う(羽茂)。
- キノエサンは一月おきに二十三日にする(久知)。
- 甲子待といい、法華宗の者が行方。この夜は夫婦間の行を慎む。この夜の子は馬鹿か唾だとい
う(五十里)。(以上『佐渡年中行事』)

甲子講は干支の甲子(きのえね)の夜、大黒天を祭る講である。橘では甲子の子(ね)が落ちて、
キノエさんとかキノエ講と呼ばれている。キノエネ大黒さんと呼ぶ掛け軸を拝んでいたという。
(以上「相川の民俗」『佐渡 相川の歴史』所収)

庚待講

- 庚甲は禪宗が祀る。この日も夫婦間の行を慎む(五十里)。

* 本学教授 日本思想史

○庚待は猿田彦を祀るので、六十一日目毎にする（徳和）。

○庚甲の時は村境の庚申塔の前で餅などをま撒く。庚申が七回ある時には庚申塚を築き直す（稲鯨）。（以上、『佐渡年中行事』）

二十二夜待・二夜待講・十二夜講

○二十二夜待といい、十一月二十二日に寺へ集まって念仏をし、甘酒をご馳走になる（小田）。

○二夜待といい、毎月二十二日で、如意輪観音を祀る（徳和）。（同上）

「二夜待ち」は「二夜待ち講」（真更川・小倉・上川茂）、「二夜待ち」（月布施・赤玉・長畝・高下）、「二夜講」（金丸）、「二夜さん」（椿・真光寺・赤泊）などとよばれ、佐渡島内では最も広く行われた「日待ち講」で、毎月二十二日夜に行われた。第二次大戦を境にして急速に衰微消滅したが、細々ながら現在（昭和五十八年頃迄）行われている地区もある。真光寺では農繁期を除いた月に今も続けている。六月・九月などの農繁期には休む（月布施）、その他数人で行っている（椿・赤泊）などとなっている。

「二夜待ち」は一般的には女の講になっていて、老婆たちによって行われる。宿は講中回り宿とし、ニヤマチ宿などと称した（月布施）。観音堂なども利用される。

講は地区により夕食の前、または夕食を終えてから集まって行なうが、午後（金丸）、または、冬季は午後その他の季節は夕食後とする地区も（小倉）ある。

行事は、如意輪観音像の掛け軸をかけ、専ら真言を操る。真更川では「ニンノウ経（仁王経）を読み、ナムカラダアを唱える」といい【補記：仏が十六大主国のために安穩にするためには、般若波羅密を受持すべきであると説いたもの。この経を受持し講説すれば、災難を滅して幸福を得ると説くため、法華経・金光明経とともに護国三部経として用いられ、仁王会が修せられた。】、月布施地区では音頭取りが鉦を叩き、もう一人が太鼓を打ち、他の人は光明真言【補記：オン・アボキャ・ベイロシヤノウ・マカボダラ・マニ・ハンドマ・ジンバラ・ハラバリタヤ・ウンと音字され読まれる。伝統的な解釈では、〈不空遍照の大印は宝珠・蓮華・光明の諸徳を具有し、これを転じて行者の身に満たさせん〉という意味。また〈婦命したてまつる。不空遍照尊よ、大印者よ。摩尼と蓮華との光明を汝は尾転せしめよ。フーン（金剛不壊の意の密語）とも解する。】を読む。

これが終わると「血の池和讃」を唱える。講が夜の場合、早くて八時か十時ころ、遅い講で十二時ころに終わるが、相川町高下では一晩明かして二十三日夜に帰るという。夕食または夜食として精進料理がまかな賄われた。まる一日間、観音堂にこもる相川町高下では家から食事を運ぶ習慣がある。（以上『新潟県史』資料編23）これは女性によるもので、ニヤマチなどと呼ばれている。安産を祈願するものという。岩谷口では、毎月二十二日に仏堂で行われる。各家から最も年を取った者が、米三合を持ち寄って掛け軸をかけて拝む。外海府の関でも戦後まで、旧二十二日の夜に婆さんたちが輪番の宿に集まっていた。如意輪観音の掛図をかけて拝んだという。同じく外海府の矢柄でも同様に行われ、安産の神だという。矢柄の手前の小野見地区では二夜待講といい、毎月二十二日に婆さんたちが堂に集まった。

私が、生まれ育った相川町大工町の南隣りにある南沢では、鎮守の湯殿山^{ゆどのさん}で行われる。南沢は寺町を含む二戸で、日蓮宗・真言宗・浄土宗・禅宗と宗派は四つに分かれるが、日蓮宗の家では十二夜講、それ以外の家は二十二夜講を、ともに湯殿山で行っている。各家から必ず一人参加し、夕方七時半ころから一時間ほど行う。十二夜講では加藤清正公の掛け軸をかけ、お題目・開経偈・自我経などを唱える。二十二夜待講では念仏・四国八十八か所の掛け軸をかけ、念仏を唱えた。両者ともに町内安全・家内安全を祈るものである。

柴町では念仏講中が毎月二十二日、ニヤマチを行っている。廻り番の宿で行うが、宿の順は右廻りである。ニヤマチは伝説上の中将姫【補記：横佩^{よこはき}大臣藤原豊成^{むすめ}の女。大和当麻寺^{たいま}に入って法如と号。蓮茎の糸で観無量寿経の内容をあらわした曼荼羅^{まんだら}を織る。一説に継母のため大和の雲雀山に捨てられ、無情を観じて当麻寺に籠もったともいう。能・浄瑠璃などに作られる。】を安産の神として祀るもので、はじめに血の池和讃・真言・八十八番の御詠歌をすべて、つづいて宿の家の家族の年齢に合わせた御詠歌、ふたたび真言、最後に「ナム チュウジョウ ホオジョー」（南無中将法如）と五十遍となえる。また、法華講中は毎月十二日に、やはり廻り番の宿で十二講を行っている。

下戸では、廻り番の家に老婆達が集まり、如意輪観音を拝むという。大浦では男性による二十三夜講「十三夜さん」に対し、「十二夜さん」と呼んでいる。老婆達が組単位で輪番宿に集まる。高瀬でも女性が輪番の宿に集まる。四つの組ごとに隔月の二十二日晚に行われる。三十歳くらいの若いうちから入るとよいというが、老婆が主体である。掛け図を宿の神棚に横にかけ、太鼓に合わせて二十二夜待の念仏を唱える。二十二夜はお産の神様だという。この夜は、小豆や小麦団子を味噌汁の中に入れてものや、煮しめを夜食として食べる。夏はソーメンを食べる。

稲鯨では、新田が大日堂で、東は二組に分かれ、輪番の宿で行っている。「女はけがれているが、それでも極楽へ行けるように」と如意輪観音を拝み、二夜待ち念仏・血の池和讃を唱える。

二見新地では、日蓮宗の檀家が、毎月十二日の夜、法華堂に集まり十二夜講をしていた。（以上、「相川の民俗1」『佐渡 相川の歴史』所収）

三夜講・二十三夜講

○二十三夜といい、お堂で踊る（真更川）。

○三夜待といい、四季の二十三日の晩に、月読の命を祭る（徳和）。（以上『佐渡年中行事』）

「三夜さん」などといい、男の講である。昔はかなり一般的な講で、毎月二十三日の夜、廻り宿で開かれたが、「二夜待」以上に早く消滅したり、形態が変わったりした地区が多い。行事は勢至菩薩【補記：呪句はオン・サンザンサク・ソワカと唱える。観世音の悲の勢力を得て衆生に菩提心の種子を与えるといい、弥陀三尊の脇待。右手に蓮華を持つが合掌するなど種々。】の軸を掛けて行われるが、月布施地区では戦後次第に男衆が出なくなったので、「二夜待」に如意輪・勢至両観音の軸を掛けてお婆さんたちが両行事を兼ねて、行うようになったという。庚申講と併せて行う地区もある。赤玉地区では昔は別々に行われたが、現在はオカナイさんに

三夜さんの軸を掛けて行い、金丸地区でも同様になった。

夕食前に始める講では夕食を、夕食を自家で食べて集まる講では夜食を出す。

月布施地区では、茶がゆと豆腐汁と決まっていたという。豆腐汁は最高の料理なので、女衆の「二夜待」には出さなかったという。

相川外海布の真更川の「二十三夜さん」は他と異なる。二十四日が地藏尊の縁日で、「二十三夜さん」は正月二十三日にその前夜として行う行事で「立ち待ち」ともいう。地藏堂に老婆たちが集まってお参りをし、持った線香がとぼり切るまで立っている。子や孫が丈夫に育つようにとの願であるもので、子供に「立ち待ち」をさせることも多かったという。(以上『新潟県史』資料遍23)

大浦では、組ごとに講がつくられ、二十三日夜、じいさんたちが廻り番の宿に集まった。「十三夜さん」とも呼ぶ。

高瀬には五組あり、戸主あるいは年寄り、いずれも男性各家から一人参加した。講中に不孝があると忌みがあるというので、講全体が一ヶ月ほど休んだ。(以上、「相川の民俗1」『佐渡相川の歴史』所収)

己待講

つちのと 己待は つちのとのみ 己巳の日で、六十日毎にあり、少彦名命を祭る(徳和)。(以上『佐渡年中行事』)

○七日講

長畝では、毎月の七日に浄土真宗の家が順回りに宿をし、お経を読んだ。(同上)

○十二夜講

二宮では、「十三日講の前の夜」として十二日の夜に、日蓮宗の人たちが集まって日蓮上人の掛図を掛けて題目を唱える。昔は毎月十二日に開いたが、現在は十二月から二月まで休むようになった。(同上)

○十三日講

日蓮宗の人たちが、日蓮上人の供養のために毎月十三日に集まって題目を唱える。五月(現在は六月)には「ごなんマキ」といって、御上人が御難にあわれたときにチマキを差し上げたという伝承から、茅で巻いたチマキを供え、九月(現在十月)には、「なべのふた餅」といって、ポタモチ(牡丹餅)を鍋の蓋に載せて供える。これは日蓮上人が龍ノ口の刑場に引かれて行くときに、一人のお婆さんが小豆を煮る暇がなく、ゴマを振りかけたポタモチを鍋の蓋に載せて差し上げた故事によるのと伝えている(二宮)。

真言宗でも、大崎では十三日に「十三日の真言」と称し旧暦十三日に、夕食後、老婆たちが集まって真言を唱えた。このときは、できるだけ大きなポタモチを作って夜食にし、余ったものは持ち帰ったものという。昭和二十年近くまで行われた。(同上)

○二十一日真言

弘法大師入寂の日とし、両津市月布施では毎月開かれた。しかし現在は農作業の忙しい五月と九月は行われなくなったという。昔は村全体大勢が集まった。ところが現在は十人くらいだという。宿は回り持ちで、戦没者の戒名を書いた掛け軸をかけ、朝十時過ぎから始める。真言を繰り返り、南無大師遍照金剛を唱え、御詠歌をうたって、昼食をはさみ午後三時ころに始める。三月二十一日を大講と称し、昔は全戸から寄ったが、現在は二、三〇人が集まって開かれる。宿はムラの誰かが引き受けた。米一升と煮染めを持ち寄り、米は金に替えて酒などを買う。(同上)

○二十四日(真言)講

両津市赤玉において毎月二十四日、ムラの行事として行われる講である。火の神としてのアキヤ(秋葉)様をまつる行事で、この日は朝から、老若を問わず一戸から一人ずつ宿に集まる。宿は村中順送りとし、秋葉大神の掛け軸の前で、ドウトリ(補注:胴取。もともとめをする人の意)が鉦・太鼓を打って秋葉真言(補注:オンサバラ, シャノウ, ソワカが一般に唱える呪句だが、佐渡では「オン, ヒラヒラ, ケンバイ・ケンノウ, ソワカ」と唱え数数珠を繰り返しながら一千回から二千回くらい唱える小倉地区がある。)を唱え、他の神々の名を全部(諸真言)唱えるという。昼食は宿持ちで出すという(同上)。尚、佐渡には、秋葉山講があるが、橘では、団子を食べ、酒を飲んだというのみで、静岡の秋葉山との関係は不明である。石花のムラはずれに秋葉山の石塔がある(同上)。私が帰省のたび目にしてある秋葉山の石塔は、沢根の入り口で窪田と境の交差する道端にある。

二

佐渡では庚申講のことを一体どの様に親しみをもってお互いが言い合っていたのか。それには、地域講としての庚申信仰には、一種独特な呼び名がみられた。

たとえば、オカネ講、オカネさん、オカノエさん、オカノエ講、などと、地域の場所・地区によって違った言い方をしていた。

そこで庚申講が江戸期に最盛期であったものが、明治期になってから昭和期年代頃迄に講中数は確実に減少している。そうした点について新潟県の民俗調査報告の資料を基に佐渡の場所・地区・地名をもって記してみると、たとえば羽茂の大崎では明治末期に半分になった。新穂の長畝や小木の小比叡では昭和初期になくなってしまった。両津の椿や佐和田の二宮では戦時を境にして行われなくなった。小木の琴浦や金井の大和船津あたりでは昭和四十五年～六年までであった。昭和五十九年現在、庚申講が行われる地区でも、僅か四、五人といったように講中の人数が減少した所が、たとえば両津の赤玉や羽茂の上川茂がそうである。他に講中の数は減ったが、両津の月布施、赤玉、畑野の小倉、相川外海府の真更川や稲鯨、金井の金丸、佐和田の五十里や真光寺では庚申の日には行われていた。

ところで、こうした庚申講をはじめ、いわゆる民間信仰に関して言えば、戦後の池田勇人（一九九九～一九六五）内閣の時代から所得倍増、高度経済成長のあおりを喰って、至る所に新たに道路が切り開かれ産業都市が生まれ、そうした急激な都市化の傾向によって、人間から多くのものを奪った。つまり、池田内閣は、「所得倍増」をスローガンに経済成長を促進する政策をとった。そのために海岸線の埋立による工業用地造成や道路・港湾建設が進み、最新鋭の製鉄所や巨大な石油コンビナートなどがつぎつぎと建設された。その結果失ったもの、それは、民間信仰もまたその一つだとして、民俗学者・桜井徳太郎（一九一七～二〇〇八）は著書『民間信仰と現代社会—人間と呪術—』（評論社、昭和四十六年）の中で、小見出「消える信仰」の項で、地域の民俗宗教調査に長年携わってきた個人的感傷と一抹の寂しさをもって消え行く庶民信仰に思いを馳せながら率直に綴っている。私も全く同感の思いであり、敢えてここに掲載しておきたい。

「都市郊外の路傍で、雨に打たれ風に吹かれながら、よくそれに耐えてきた地蔵尊や道祖神・庚申の石像をみることがある。自動車の往来が頻繁となり、その排気ガスに苦しめられながら道行く人に、ふとなごやかに微笑^{ほほえみ}みかけられるこれら野の石仏の存在は、ほっとした安らぎを人々に与える。都人士がかすかながらも人間であることを意識する一瞬であるかもしれない。ところが、それすらも、宅地造成の悪魔、ブルドーザーの爪のために引掻かれ、打ち倒されてしまう。それは時勢の赴くところであって一小市民の感傷ではどうにもならないことであるけれども、胸からこみあげてくる一抹の寂しさを拭うことはできないのである。

こうしたチマタの神、野のホトケには、ムラとかマチに住みついた人々にとって忘れることのない思いがこめられている。……その供養のために日参した地蔵は、いつも憂愁の歎きをいやしてくれた。そうした地域社会との深いつながりや固いきずなは、無惨にも断ち切られ、壊されてしまった。たえず過去の思い出に生きなければならない古老にとって、こうした心の空洞は、何によって埋められるのだろうか。

民間信仰の衰退は、あまりにも早く訪れてきた。明日の人生に希望をもつ若者たちにとって、それは、さほどの打撃ではなかろう。いな、むしろ歓迎されるかも知れない。けれども、その代りを求めるにはあまりにも齢を重ね気力を失ってしまったとしよりにとっては、むしろ絶望的といえる。しかし、好むと好まざるとにかかわらず多くの民間信仰は、地域社会の大変化にともなって存立の意義を失い、急速に消滅しつつあるのが現状である。」（二三九～二四〇頁）

たとえば、私が現在住む東村山市（現在人口は十五万七百人）そしてその周辺都市の府中市、清瀬市、小平市、国分寺市、立川市、小金井市等がかつては農作業衣に鍬をふるっていた田園の牧歌風景も一部見られるが、いつの間にか消え去り、洋服のサラリーマンが通勤往復のラッシュにひしめて乗車、各駅々で一度に多くの人たちが乗り降りし実にせわしい。つまり戦後、三十年代後半期より欧米の先進諸国に追いつけ追い越せの目標を掲げ高度経済成長を唱ってから、その驀進^{ぼくしん}は実に勇ましく、急激な勢いで田畑が整地され団地やビルが変わり建築ラッシュがおしよ

せ東京のどこにでも産業都市が生まれた。また、工場が増えていった。

一方ではその経済の担い手働き手は、日本全国にある地方の零細農家や漁業で生活する職場を去り、村を捨てて少しでも収入の良い便利な都市へと流れこんだ。住んでみると誰からも拘束されない自由な生活環境の便利さは地方出の人達を完全にとりこにさせ、魅力ある都会生活から離れられない者にした。したがって、一気に過疎現象がはじまり田舎、地方文化はさびれる一方となった。

都市は次々と地方出身者の転入によって、膨脹し続けていった。集合住宅の団地は次々に建造増築されていった。こうした異常ともいえる人口流動が農山漁村の過疎化に一層の拍車をかけ、都市の過密化は同時に地域の過疎化と反比例した。それから四〇年余りが経った平成二十一年（二〇〇九）の二十一世紀においても、そうした都心への流入による過密化現象と、地方の農山漁村の過疎化現象は止むことはない。かつてのような急激な上昇カーブはなくなったが、ドーナツ現象を起こし、周辺の近郊都市の人口膨脹は今でも続いている。したがって高齢化少子化と世間というのが、私の住む東村山市の人口は確実に若者世帯数の増加現象がみられる。

以上、そうしたことは従来の日本社会の人口構成を大きく変えたばかりか、地域社会構成そして人間関係の断絶や希薄さを作り、人間の価値観・対人観、とくに人間の尊厳を無視した自分さえ良ければよいという自己中心的な価値観や打算的な物の見方、そして何といても元凶である拝金主義の考え方を植え付けたというか作ってしまった。果たして本当にこれで良いのだろうか。人間の幸福とは一体何なのか。物の豊かさ便利さだけが幸福のパロメーターなのか。

たしかに経済優先的な生き方は人間生活に快適さと物の豊かさを保証したが、他方で、人間的絆、強固な信頼関係に支えられた結び付きが失われてしまった。得た面に反して失った面も相当に大きなものがあり、改めて人間性を回復すること、豊かな人間的感性や情緒、ここで敢えていうならば日本人の情緒が内外からも切に求められている現代日本の精神文化が失われた状況だと私は考える。

資本主義社会では競争主義・原理は人類の発展進歩には当然である。その優れた良い面の必要性は大いに認め評価するところである。しかし人間相互の信頼関係を失うことにも通じ、ともすると敵対関係を生みそれが長く続き、明らかに健全とはいえず良いことではない場合もある。毎年日本では自殺者が三万人を超え、フランスも同様に先進国は同じ傾向がみられる。パートや臨時雇用の非正規社員が正規社員より人口的に多い現状はどう考えてもどこか狂っているとしか言いようがない。そこには競争社会の歪みが現れ出てきている。

元に戻って、昭和四十年代になると、庚申信仰の衰亡は顕著な現象として目で見て確かめられた。昭和四十六年六月三日の毎日新聞の東京版には「消えて行く庚申さま」と題し、東京都練馬区石神井地域の状況が紹介された。そのことの意味は、押し寄せる道路整備や拡張、ビルラッシュの波が地区に昔から信仰の対象としてあった小祠や石製の庚申塔・塚を取り除き、どこか人目の見えない所に移し置き、また極端に言えば破壊したり地中に埋めたのである。

考えてみれば、昔から長年の間庶民に親しまれ信仰され、多くの人々に娯楽の機会を与えた庚申塚などは民衆の尊い文化財、史蹟なのである。日本国中に広く分布し信仰されていた青面金剛

も猿田彦を刻む庚申像もなかなか採めなくなった。すなわち団地やアパートの建設、宅地造成などが急ピッチに進められた結果、森や林が伐り開かれ田畑が荒らされ、丘や原っぱの緑が失われ、その道端にポツンと立っていた青面金剛像、猿田彦像、庚申塔や塚、地蔵、馬頭観音像、聖観音像、その他の数々の神・仏・菩薩像を消した。そして今や博物館、公園、文化財記念館、江戸東京たても園（花小金井公園内）、ふるさと歴史郷土館（府中）などに行かないと見られない哀れというか淋しい現状である。

総体的に言えば、庚申信仰はもはや明らかに過去の遺産でしかすぎない。日本全国どこにでも目にしたあの懐かしい庚申塚や塔は採めないのみならず、今の若者にはこの名称すら知っているものはまずいないであろう。このことの意味は簡単である。もはやこうした塚や塔が一般民衆の宗教心を支えなくなったことを証明している。つまり宗教としての存在意義がなくなってしまったからである。たしかに既成の共同体社会の講は、必要としなくなればいつしか自然消滅、崩壊してしまうものである。しかし人間が存在する社会では、無くなっておわりではなく、これに必ずかわる新しい共同体社会の講的機能をもつ信仰が生まれてくる。つまりそうした社会の変動に応じた新しい民間信仰は今でも生まれており、それが新興宗教だといっても決して間違いではなかろう。方向性、目標が定まらない変転極まることを知らない現代社会にあっても、庚申信仰に換わる別な庚申信仰というか、新しい庶民信仰と表現すべきか、その中心には呪術が要請され強く求められているのである。

ところで、庚申信仰の神とは一体どのようなものだったのか。要するに一般に庚申の神を、豊作の神、漁業の神として祀り、農業の神、養蚕の神、馬の守り神様、豊漁の神と信仰された。人間のためにあちこちと奔走し福をあつめてくる〈福の神〉だとみなされていた。つまり民間では、庚申の神を現世利益の対象である福神として仰いでいたのである。翻って、これ迄の地方農山村の漁村の職業に携わってきた人が第二次、第三次農業に就き大方がサラリーマン化された。またサービス産業化の産業構造の高度化に伴い、そうした職業が増えた現代社会では、また求められる娯楽性ある福神も変わる。なぜなら、求める対象者自体が変わったのだから求められる信仰の内容も変わるのも当然の理であるからだ。

三

次に庚申信仰の実態について記述し、その特色について明らかにしたい。その前に一言、お断りしておきたい点がある。

それは特別に年代を明記しない限りは、「現在」と表現した場合おおむね次の基本資料に基づいているので、一応、昭和五十八年一杯と理解して頂きたい。なぜなら、私で使用した文献は『新潟県史 資料編23』（民俗・文化財二 民俗遍Ⅱ）であり、発行年次が昭和五十九年三月三十一日であるから、凡そ編集から製本迄を半年かかるとして、五十八年後半期頃迄の民俗調査期限を定めたい。正確に言えばむしろそれよりか数年前か十数年前に取られた調査記録と考えた方が間違いないであろう。

佐渡では講は各部落集落の大きさに応じ幾組にも分かれた。私が最近（平成二十一年三月）古

老金子金吾（元小木町町会議員）氏に聞いたところ、小比叡部落では約五〇世帯があり、それを四組に分かれてそれぞれに講が行われているとのこと。一世帯から一人を出すとするとほんの僅かの人数で行われていることになる。これも過疎化のため本来の人数からいえばもっと多かったはずである。基本資料によれば、一般的には一講中に十数名から一五、六名といったところであると録している。

例でいくと、赤玉には、昔から変わらずに現在も四組あり、真光寺では沢林に二組、高野・仲野西地区に合わせて五組の講がある。相川の稲鯨では新田・中村・東・砂原の五組のうち、浄土真宗の砂原を除くほぼ全戸に庚申講がある。真言宗・浄土真宗の家が相半ばする西組には両宗に講があって、それぞれに行事を行っていた。しかし、人数が減ってきたため現在は両講が一つに合併した。当然の如く講では掛け軸を祭壇の中央にかける。

佐渡の特色としていえることは、祭神を猿田彦命とする講と帝釈天^{インドラ}とする講が半々で、越後のように青面金剛とする講も多い。佐渡においては、講は神仏混淆の信仰形態で行なわれる地区が多い。二宮真光寺その他では祭神を猿田彦命とする一方、行事では真言を唱える。両津の月布施も同様であり、光明真言そして般若心経と念仏を唱え、「オコウシンデン コウシンデ、マエタリマエタリ ソワカ」と庚申講の真言を唱える。

また、真野町の金丸集落では天照皇大神宮と鎮守の引田さま（引田部神社）、それに庚申講（オカノエさん）の掛け軸をかけて真言を唱える。その際、順序として最初は神様の方からはじめ、そのときは燈明を点し、次に中休みをとり、念仏（南無阿弥陀仏）を唱える時には線香を点すと、古老金子金吾氏から私は直接に聞いた。少なくとも春祈禱はそうだとのことである。小比叡に住む今は七十歳後半になる金子氏が物心が付いた頃には既に庚申信仰の講は回りにはなかったと語ってくれた。それは昭和五、六年頃である。したがって庚申講が実際に行われていた金子氏の小比叡地区では昭和初期あたり頃までだったのが確かなようだ。他方、また他に真野町大倉谷の古老中塚宗一氏に尋ねると、島内ではつい最近迄、平成十八年（二〇〇六）頃まで行われていた所があった、との貴重な話も聞けた。

また、私は昭和二十三年（一九四八）生まれで、生まれ育った大工町の南端のお稲荷さまの一角は立派な庚申塔がある。私が物心ついた頃からこの塔の前で祀りが行われた記憶は全くない。この大工町に立つ石組台付きの一m以上もある大きな「庚申塔」と刻んだ石塔は庚申日の祀りが終わった時（庚申の日は二カ月に一回で、年六回ある。三年間連続し十八回続けると、一区切りとして盛大な供養をする。それが供養塔を建てることであった）に記念して建てられたもので、恐らく江戸時代～明治期頃に造られたと考えられる。私が庚申信仰について書く気になったのは、大工町のお稲荷さま（このお稲荷さんは元は私の家屋敷の守り神として裏山の^{たかとう}高登に祠として祀ってあったものを祖父宗吉が大工町の境の地に町民のためにと移したものである。昭和初期頃）の敷地内の道端にポツンと淋しく立つこの庚申塔を帰省のたび目にした。今や還暦の年齢を迎えた私は何故かどうしても研究してみたくなったのがその切っ掛けである。

稲鯨では、「日待ち、月待ち講には六面六臍の帝釈天の掛図をかける」としながら、仏事とは関係ない行事とし、神主を招いて祝詞をあげてもらおうという一風変わった講をする。

要するにその真意は、作神・百姓の神（羽茂の上川茂）、豊漁の神（相川の稲鯨）、金もうけの神（佐和田の五十里）、火伏せの神（小木の琴浦）という様に、農村や漁村では庚申の神も農業の神、漁業の神、農作の神として祀る所が多い。一般には豊作の神、豊漁の神と庚申神がみなされていたことが、ここ佐渡においても同じである。つまり、民間民衆においては、庚申の神を現世利益の欲求とマッチした「福神」として信仰されていたのである。その点、中国とは明らかに異なる。

もともと中国では、人間の罪障を天帝に告げる為、そこで人々はそれに恐れをなして、一日中身を慎み、夜を徹して敬虔な祈りに終始する。だから、庚申の晩に夫婦が交わることは固く禁じられていた。すなわち簡単にいえば、禁止行為、禁忌（タブー）であった。典型的な行動は、庚申の日には肉や魚を食べてはならない。それを破って食べると、口がまがる、目がつぶれる、病気になるったり大怪我をするなどといった。そこには規制禁忌を強いることによって、とかく怠りがちな人間に精進の実績をあげさせようとする狙いが、庚申信仰の思想の根底にある。すなわち、人間としての品行方正で正しい道を歩ませる為に、タタリをもたらすとかバチが当たるとか種々に恐れさせ、人間としての社会倫理道德を実行ならびに保持させたと理解される。そこに本来の庚申信仰の目標と意義が認められる。

また、この庚申神は実に絶対的崇拝心を要求する神であり、荒々しい神様だといえる。但しそうした要求を守れば人間に福德を授ける神であった。つまり富を与え寿命延命が適えられるという「福神」そのものである。庚申信仰は中国の民間で発達した道教信仰に起源をもつと理解されるが、その民間道教に三尸説の虫が天帝に報告する話が説かれる。外来思想が日本に受容され定着するとき、必ず都合の良い方向に変容される。すなわち分かり易くいえば、日本の四季による精神風土と習慣の中に換骨奪胎【簡単に言えば、組み立てを換えて独自の価値をもつものに作り上げる意】され現世利益的福神の性格に変容されてくるのがわが国の際立った特徴であり、精神文化の一特質を現わしていると見られる。実はそこにこそ日本人の知恵と優れた応用力が形となって生み出されたと捉えたい。

次に佐渡に見られる講の特徴は、講が神社や寺院またお堂などで開かれることはないことである。そのほとんどが廻り持ち講中の家で行われる。それも一回だけの「回り持ち宿」である。その宿の順の決め方は、クジによって決め、帳面に記録しておく。その際、クジに当たった家の者がその日に忌み事に当たるときは、次の番の家に代わってもらう（真更川）。また当番の家が当日どうしても都合が悪いときには一日延ばすというところもある（大崎）。

庚申講への参加出席者は、ほとんどの場合は主人あるいは男性だけとする。しかしそうでないこともあり、たとえば二宮では老婆ならよいか、稲鯨では年寄りの女性がかかることがある。『佐渡年中行事』の「一九、年始」の頃に「村年始 ○年始・春礼・字礼などといい、大抵主人か長男か男性が出る」（六〇頁）とされてある様に、主人又は都合がつかないときは長男というのと同じ習慣による考え方に近いかとも推察する。

他方、その逆の場合で、時代状況も反映してか、昔は男だけだったが、今は女性が多くなったという上川茂地区の例もある。

次に庚申講が行われる時刻に関していえば、島内では一般的に「夕食前から」と「夕食を食べ出かける」が半々で、但、家で夕食を食べてから出かけて行く場合の多くは当番宿で夜食が出されることになっている。漁村で生業が成り立っていた稲鯨では、「今日は沖ナギだ」といえば出漁前に海が荒れている時には夕食後に講がはじまる。

『佐渡年中行事』には、「三八、春祈禱・お日待の項の箇所「○宵にするのがお日待で、朝するのが祈禱であるという（鷺崎）」（一一六頁）とはっきりと明記されていることから、宵・夕刻に行われているのは庚申講の方で、春祈禱になると日出から日没まで（一一八頁）と記されている。しかし庚申講以外の一般的講中による講などは、とくに現代になってくると午前中に済ませたのが普通だったと思われる。またその事について言及すれば、「春祈禱 ○春祈禱又は御祈禱始め等と総称するが、宗旨によって言い方が違うようである。神道が春祈禱、浄土真宗が春法談、真言宗が百萬遍、或いは祈禱真言、日蓮宗が祈禱題目、真宗が祈禱念仏であるという」（一一七頁）。また「○僧侶・神宮が各戸を廻って祈禱するのと、村祈禱（中山・北狄）、或は大字祈禱（徳和）等といい、一所に会して行うものと、講中の各戸を講員が廻り祈禱をし、最後にタバネといって、堂や宿で馳走を食うものとある。この時厄年の者の家では、特別馳走する。」（一一七頁）。更には「お日待」の項には「僧の祈禱があり、白粥と打豆汁を村中食し、夜をあかした（西三川）。昼は親父共、晩は若者共が、お日待馳走をした（小田）。昼は親類、夜は町内一同、宿に集まり、神官の祈禱（相川）」（一一九頁）とあり、庚申講とはなっていないが「○家毎日待（真更川）といい、神官、僧侶・山伏が各家を廻り、祈禱するのである。○金沢村湯谷では、僧は経をよみ、屏風をたてまわして、その中で通夜する。」（同上）と、各家を廻り祈禱するのは違って「夜は町内一同、宿に集まり」「通夜する」といった記録は庚申祈禱と時刻も町内一同（組員）が宿に集まることも同じである。『佐渡年中行事』に「○神官から祈禱敝いをしてもらい、祈禱守を受ける（梅津）。僧侶は読経し、お札をはって行く（久知）」（一一七頁）「寺で祈禱……護摩をたき、祈禱札をもらう（松崎）」（一一九頁）と記す様な〈祈禱札〉〈祈禱守〉も恐らくは庚申待のときも配られたものと想像する。

庚申様への祈禱行事は、まず第一は掛け軸の前へ供え物をするところから開始される。赤玉では一人分のお膳をお供える。オカノエさんは丸い物が好きなのでオマル（団子）をあげリングや柿を供える。もちろん皿も丸いものである。皿は特別な皿でなく日常家庭で使っている平たい中皿である。神道系庚申信仰であれば当然三寶の上に白紙を敷き、その上にお飾り餅の例に見るように恐らく団子などは十個位積み並べたであろう。神棚ならば白紙を敷き、大きい御鏡を二つ重ねて一つ供える（松崎・金泉・徳和・西三川・長畝・羽茂・大和・真更川・多田・河内）様に、白紙を敷くか台の上に白い布を敷くかして大昔は丁寧に行われていたものと考えるが、現代ではすべてがどこでも簡略化され、お経を読むも省略され形ばかりになって来た。

次はお供えの団子について記述しておこう。大和横谷ではお供えの団子は小判形で、大和船津では算盤珠形そろばんたまがたに作るころがある。また、横谷ではご飯は茶碗に山盛りに供え、祈りがすむと一粒か二粒ずついただいて食べる。長畝では卵なりの団子を家族の数だけあげるところもある。

小倉では、大団子を上げ、集まった人たちがそれぞれにもらって帰り、それを小さく切って家

内中で食べるところもある。つまり神仏様にお供えした供物には福がある。その福を家族一同が健康であるために分け与える行為はごく当たり前のことであった。それは仏様に供えるご飯（お仏飯・お仏供）も同様であり、私の母は毎朝焚き立てのご飯を釜から取ってまず一番に仏飯器に盛ったものをお供えした。そして取り換えて固くなったご飯は釜の中に入れ温めてから一人で食していたのを幼少時分より見て育った。母は「お供えしたご飯を戴くと健康で風邪は引かない」とよく言っていたのを記憶する。そこには庶民の信仰心が日常生活の中に逞しく生きて働いていることがわかる。

二宮では団子の呼称を「オカノエさん団子」といっており、船津と同じく算盤珠のような形の団子を上げ、帰るとき分けて持ち帰る。

五十里では、オカネさんは三三（3×3）人の子がいるので、団子を三三個供えるとオカネさんが喜ぶという。後で集まった皆がもらって帰る。

また、真光寺では団子は男が作り、女には一切手をつけさせない決まりがあった。

しかし、『佐渡年中行事』の「しんこ撒き」の行事では、団子を作る際、その粉ひきは女若衆で、団子には男女共同（現在でよくいうところの男女共同参画、男女雇用均等法といった所か）である（小泊）、と記され村や地区によって随分と異なっていたことが分かる。同書には、米団子と小麦団子の二種ある。また、餅米で小さく団子の様に丸くしたお供え物もある。ついでに言及すれば、さらに祝いの場などに、白玉といって、色の白い玉で、餅米とうち（ねばり気の少ない、ふつうの米）の粉を混ぜこねて丸めたものを、湯でた汁粉（あんこを溶かした汁）の中に入れて食べる習慣も佐渡全域にわたって行なわれていた。

庚申塔や二十二夜・二十三夜の塔は島内各地に残っていて、昔はニヤマチは各地で行われていた。団子まき、いわゆる「ヤセウマ」を堂などで撒いていた。すなわち釈迦命日か不動尊縁日にはヤセウマという団子を信者や参詣者に向かってまく。その際、御詠歌・真言を唱え、御詠歌大会も行ったりした。そこで「ヤセウマ」の例を資料文献ではどの様に録されているかそのままを掲載しておこう。

- ヤセウマ（大和・鷲崎・西三川・五十里）、ヤセゴマ（久知・八幡）、シンコ（夷・河内・中山・松崎・河原田）、クヂラ団子（大崎・小泊）と称するものを作る。いずれも巻ずしを作るように、中に色のついた部分を巻き、小口から、切ると、美しい模様があらわれる。
- これはねはんの図にかたどったのだ（五十里）。五色の雲にたとへたのだ（八幡）。大崎では次のように言っている。仏が病気の時、夜叉ヤシヤという貧乏な婆さんが、有り合わせの栗黍などを摺って団子を作り、見舞いに持参した。仏が「夜叉うまい」と食べたので、ヤセウマという名がつき、色々の彩色をするのだ。
- その他、赤・青・黄などの団子をもつくり（久知・北狄）、寺や堂で撒く。小泊では若衆の年長者が撒き役で、子供・年寄・若衆と別座になって拾う。特に若衆の座へは笹葉を入れた大団子を撒きつけ、大騒ぎをする。岩首では寺の屋根に上がって撒き、村人は一番よげな（悪い）着物を着て行き、争い拾う。（『佐渡年中行事』の「四五、しんこ撒き」一三七～一三八頁）

四

ここでは庚申信仰を成り立たせている一番重要な三戸^{さんし}について分かる範囲で解説をしておく。

三戸という言い方は日本では通り名になっている。しかし、中国ではほかに三^{ぼう}彭、伏尸、尸虫、尸鬼、尸賊、尸邪、尸彭など、いろいろな名で呼ばれている。中国での庚申の信仰の最初の文章は、既に述べた様に二世紀ごろ方士が唱えだしたものであり、四世紀はじめにまとめられた葛洪^{かつこう}の『抱朴子』に記されてある。そしてこの三戸の説が四世紀半ばすぎに道教に取り入れられたのである。

人間の体内には三戸というものがいて、形はないけれども、鬼神や靈魂のたぐいであるという。人間が死ぬと三戸は鬼（亡霊）となって勝手に方々を遊び歩いて、祀ってもらえることができるので、いつも人間がはやく死ぬように期待して、庚申の日ごとに天上に上って行って、人間の過失・科・欠点などを司命の神さんに密告するという。この『抱朴子』には鬼神のたぐいだとは記しているが、その数については何もいっていない。どうも一匹のように読み取れる。

しかし、後世になってくると（たとえば唐代に完成する『太上三戸中経』^{たいじょうさんしちゆうぎょう}や『庚申縁起』には）上戸は彭据^{ぼうきよ}（頭に住む鬼で黒色の虫、形は人のようで三寸ある）、中戸は彭質^{ぼうしつ}（腹にいる虫である。青色の虫で形は人のようである）下戸は彭矯^{ぼうきやう}（形は白い鶏のごとく足にいる虫である。庚申の日に鬼となって人に障る）というように、彭は人格神としての姓で、名はこのほかにいろいろと異なって数が増え、三戸九虫になったのである。この九虫が日本では「オカネさんは三三人の子がいるので、団子を三三個供える」という表現となって理解されてくるのである。こうした三戸九虫の信仰が日本の庚申信仰の核と成り生かされ変容されているわけである。因みに、九世紀末に成立した藤原佐世^{さげよ}の『日本国見在書目録』に『抱朴子』のことが記載されていることから、日本にもこの頃流布していたことが分かる。

ところで、三戸という虫は、現代人でも時として「腹の虫が納まらない」「腹の虫がぐうぐう言う」「腹の虫が鳴く」とかいて、自分の身体の中に虫が住んででもいるかのような言い方をして何ら不思議とは考えていない。それと同じく、三戸というものも虫の仲間で、それは人間が生まれると同時に、身体の中に住み着いているものと考えられていた。

その三戸とは恐らく寄生虫から着想されたのではと憶測されてもおかしくはない。薬を飲んで三戸を駆除する方法もあり、その薬材には下剤か駆除剤が入っていて、中国では下剤などで寄生虫を駆除する方法が古くからあった。つまり人間の体内には三戸九虫がいて、大きな害を与える。九虫が図に描かれても虫の形をしている。したがって、中国では蛔虫とか蟯虫とかの寄生虫と考えられていたのである。

恐らくヒントになったのは死体にわく蛔だったに違いない。三戸の「尸」は人が死んだ体を伸ばし横になっている様子を形どり屍（漢字の構成上のなりたちは、尸に死を増し加えて、尸と区別し、おもに「しかばね」の意に用いる。小川環樹・西田太一郎・赤塚忠編『角川新字源』（改訂版、角川書店、一九九四年、二九七頁）の原字で、第一義の「しかばね」の外、「かたしろ」（形代）の意味もある。また、「尸」には祭礼のとき、神の身代わりとしてまつりを受ける者の意味も

ある。また一方、熟語の「尸虫」は死体からわく蛔虫を指す。人が死んで日が経つと必ず蛔虫がわく、それを古代人は見て、人を死に至らしめる元凶は人の生体にひそむこの不可視の「三尸九虫」だと考えたと推察される。

尚、この三尸は人間の欲、殺生、邪淫、その他の悪事を起こさせる原因で、諸悪の根源だと中国古代の道士は考え、道士としての目的を達する修業をそこに価値づけた。要するに中国人の長生きを望む庶民の考え方や信仰心をうまく利用し取り込んだものといえよう。

もう一方で考察される重要な問題点は、魂魄こんぱくのことである。いわゆる魂と魄は対語で、共に人の命を支える精気のことである。魂の方の漢字のなりたちは、鬼と云（めぐりあるく→運の意味）から成り、「たましい」の意を表す。その「たましい」の意味は①人の生命を主宰する精気。②人の精神を主宰する陽の生気を魂、肉体を主宰する陰気を魄といい、人が死ぬとはなれて魂は天上にのぼり、魄は地上にとどまると考えられた。靈魂のこと。

他方、魂には「こころ」「おもい(思)」「心境」の意味もある。魄の方も同じく「たましい」の意を表す。その意味は①精神。靈魂・魂魄の総称。②人の肉体を主宰する陰の生気で、死後地上にとどまる。「こころ」「おもい」の意味もある。また、広く行きわたる、満ち広がる等の意味もある。(『角川新字源』一一四〇頁)

要するに簡単にいえば、魂は陽の生気、魄は陰の生気として捉えられ、人が死ぬと魂の方は天に昇り、魄の方は地にとどまるとされる。この靈魂についての考えと、生死の原因とみられる司命録神の考えが結び合わさって、いわゆる三尸説が誕生したものと推測することは容易だといえよう。

このように庶民が宗教に求めるものはもっぱら現世利益信仰にある。そこで庚申の御利益というものをみれば、庚申神・庚申信仰が一体何であるのか、人びとがこの信仰に何を求めてきたかが分かるのである。要するに三尸説には「寿命の神」のことが中心で不老長生の上に成り立っている訳である。

むすび

庚申信仰の内容はこれまで論述してきた様に種々雑多である。それは土地により講によって異なりを見せるからである。最も一般的なものは農作神、厄除神、福神、土地神、諸芸神と考えられる。稀に馬の守護神、縁神、子供守護神などもせられ祀られる。クジや廻り順の廻り宿制を取って、一戸一人ずつ宿に集まる。そして講中の信者や参詣者の全員が祭壇の前に並んでお勧めをするが、庚申の唱言や念仏や般若心経、光明真言などを唱える。これが終わると共同飲食をする。このときに合わせて打ち解けた普段話さない諸相談、無尽、積立金なども行なうところもある。そして夜半までいわゆる茶話をして親睦を深め合うのである。もちろん、祭神にあげたお酒(御神酒)を下げて仲間全員が酌み交わしてこの時は無礼講で遠慮なく話し合う、というのが特に近現代にみられたムラ講集団の実態であった。なぜならば、一面は信仰行事、年中行事であると共にまた他の面娯楽性の所もあって、知識の交換機関を兼ねそなえていたのが庚申信仰であり、それ以外に甲子講、七日講、十二夜講、十三夜講、二夜待講、三夜待講、二十三夜講、二十四日講、観音講、山神講、秋葉さん念仏講、産土講うぶすなその他数々の講があって、庚申講とも習合してい

る「庚申念仏講」というものもある。近年では夜中までしなくなった所もあるが、日本民俗宗教として重要な点は座談のうちに村の伝承もいろいろの形で受け継がれて来たところにある。そしてこの講中の講組織を通して祝儀、とくに不幸な時の相互扶助、無尽講などによる経済生活扶助の機能が果たされてきたことは注目される。

そこで佐渡市相川町に見られた庚申講に的を絞って、その講が具体的にどの様に祀られ行なわれて来たのかの実態を「相川の民俗1」『佐渡 相川の歴史 資料集8』所収（相川町史編纂委員会編、昭和六十一年二月）を基に紹介する形式で記し「むすび」にかえたい。なぜなら、地元相川町の町史編纂委員会が各々の専門委員を動員させ時間をかけ調査記録した調査報告資料に優る確かな文献はないからである。それは昭和十三年頃、民俗学者柳田国男氏が来島され、佐渡の郷土文化のレベルの高さと宝庫に感嘆され、佐渡の郷土史研究家の医師中山徳太郎氏や当時県立河原田高等女学校教諭の青木重孝氏らと相互に密接な連携をとりながら、柳田国男氏の佐渡の民俗文化・宗教にたいする熱い思いと氏の肝煎りで調査が稔った成果が名著『佐渡年中行事』である。当時の佐渡には佐渡郷土史研究会、佐渡民俗研究会などの郷土史、民俗の研究組織があったことが幸いした。このうち佐渡郷土史研究会は、産婦人科医院を開業し傍ら佐渡民俗研究に資材を投じ没頭していた篤信家がいたからである。またそのグループ中の一人に山本修之助（一九〇三～一九九三）氏も挙げられる。そして息子さんの山本修巳（一九三八～）氏が今は父の跡を継ぎ『佐渡郷土文化』（年三回発行）を主催する。氏は島内俳句や短歌の会の雑誌と併するかたちで、佐渡の伝統文化に関する島内外の高志陣による優れた数々の論文も掲載しておられ、その意義は高い。

元に戻ると、講とはさまざまな目的で構成された集団であり、鉾山町相川とは、江戸期慶長年間以来、幕府による相川金銀山の開発にかかり、慶長五年（一六〇〇）佐渡を直轄地である天領とした時代まで遡る。当時淋しい一寒村漁村で人口も僅かしかなかった相川（元は鮎川）村であった。ところが江戸最盛期にはこの小さな町で五万とも十万ともいわれる人口を有する世界有数の鉾山都市・相川が佐渡が島に誕生することになる、一時は佐渡相川県という輝かしい名称もあった。相川町は全国各地から集団で集まって来た人びとによりつくられた。したがって、集団ごと習慣、行事、宗旨など実にさまざまであった。初めは紛争や競争も多々あり、集団ごとに団結力や共同性を示す必要な社会だったと想像する。それだけ人の集まる場は多かった。祭りや年中行事もたくさんあったことは言うまでもない。人びとが集まり談笑するコミュニケーションの機会は頻繁にあり、島内でも他の村や部落よりも比較にならない位に数多くあった。その結果、町内、講中、檀家、仕事仲間、女同士、男同士、さらには町全体でさまざまな会合や交流が行なわれた。こうした行事や祭りは町内一団となって仲間同志・同士たちが結束していくための交流や情報交換の場と成長し、一層発展とともに島外からの人びとを引き込む都市相川を形成していった。そうした歴史を頭におきつつ講集団を見てみたい。

まず相川にはいろいろなものが見られる。①定期的に特定の神仏を祀るもの、②伊勢神宮や吉野山大峯山など外部への代参・御師を目的としたもの、③経済的な動機で結びついたもの、④商業的その他同業者の集まり、⑤宗旨を同じくする者の集団など多種多様である。それが相川の特

徴だといえる。しかし一方で、時代推移や流れとともにその内容や機能に多少の変化を示しているものもある。それ迄には厳格に守られた伝統文化が継承されてきた内容のものが、いつしかガラけてしまってなかには目的意識が酒や茶飲み友達で集まる娯楽的趣味を楽しむにしている者になってしまったところもあろう。以下、そうした相川町の講の多様な姿を映像フィルムを見る様に叙述してみたい。

庚申講は干支の庚申かのえさるに当たる日に、家の主人が廻り番の宿に集まるもので、オカネサンなどと呼ばれ、各村で行なわれていた。庚申講は概して相川町の北部地区では早くからなくなり、南の二見地区では一応最近まで行なわれている。すなわち最近とは一応昭和六十年頃を指すが、古老中塚宗一氏の話によれば平成十八年頃までであったという。

庚申講は数軒が一組となって構成される。関では四組、大倉は三組、小野見が四組というように一つの村の中で幾つかに分かれる。北川内のオカネサン講は、家の遠近にかかわらず、気の合った者同士が五人ほどで組をつくったという。大浦や米郷よなごでは、村の組単位に庚申講がある。いずれも参加者は家の戸主である。つまり男であるということになるが、例外もあり、都合が悪い時には代わって女性が出ることもあったという。高瀬ではまた、講に加わるのは田を八反から一町持っている家のみだという。考えると、二ヶ月に一度の講を維持するのは諸出費のため相当な負担であったであろう。どの村でも庚申の日に、廻り番の宿に一同が集まり、中央に祭神の掛図掛軸をかけ、真言や念仏を唱えて夕飯を食べた。

関では、この日の料理は仏教に従って精進料理を出し、ナスビなどを宿の主婦の腕次第で料理した。「オモリモノ」といって、団子を指三本でつまみ、指の跡をつけたものをつくった。参加者には二個ずつ持たせたもので、参加者が十人ならば二十個つくったことになる。庚申は男衆だけの集まりのせい、徹底したもので関では庚申講の料理や団子、まだダイシ（大師）講の団子を女が食べてはならないという言い伝えがある。また人間であっても、猫や牛であってもこれを食べると、不具の子を産むと伝えている。ただ、老婆になったら食べてもかまわないという。『佐渡年中行事』の大見出「八九、大師講」の〈二十三日の食物〉と記す項には、「○この団子は、女が作ってはならない（真更川・大崎）。又女は食してもならない（八幡・真更川・大崎）。女が食すと、摺粉木の足の子を産む（小田）。女も食してもよい所（片辺）もある。」と記され、禁忌タブーは何も相川だけに限ったことではなく、佐和田町八幡や羽茂町大崎にもあったことから島内広い範囲にあったものと判断できる。

大倉では、オカネサンといい、昭和二十二年まで行なっていた。丁度私が生まれた一年前である。面白いことに、「オカネサンは鍋の足のような形で組をつくるものだ」といって、三組に分かれていたという。

北川内では、この庚申の日に大きな団子を七個作って供えたという。高瀬では、お庚申さんの団子は平らな形につくったという。

他方、旧相川町とりわけ鉾山町相川のような町部の庚申講は一体どうであったらうか。

それは農漁村とはまた趣を異にした。たとえば商店街の商家の主人が毎月廻り番で宿に集まったという。下戸では四十物あいのもの（塩魚・干魚類を取り扱った問屋・商店）や干物屋などの商人が、庚

申の日に掛け軸をかけて祀り、商売繁盛を祈願したという。因みに二分団の上町には四十物町あいのものという地名までが残っている。但、そこで私が知りたいのはどういう絵柄の軸図であったかである。猿田彦とか帝釈天と漢字に書かれた掛け軸か、または絵像であったのかが知りたいところである。

濁川では、山伏が庚申さんの石を祀っていたが、庚申講はなかったという。そうすると、私が生まれ育った相川町大工町の庚申塔はナゾが解けそうである。すなわち、この土地は元は代々山伏修験の牛窪氏の法教院が元屋敷内に建っている庚申塔であるから、法教院が祀っていた石塚だという推測が付く。後になって他から移して置いたのでなければ、間違いないであろう。

柴町では、現在も一組の庚申講が続いている。それは酒が主体の「飲み庚申」だともいう。庚申講の祀りが、いつの間にか気の合った仲間となり、いわゆる飲み友達と成ったことを意味する。明治十一年十二月八日に、成立したと伝えられ、このための毎年十二月八日を「御誕生待おたんじよまち」といって、年六回の庚申に加え、七回集まっている。現在、講中は七人なので、丁度年に一回宿が廻ってくることになる。なぜなら庚申講は二ヶ月に一回行なわれるからである。宿は毎年、「オタンジョマチ」の集まった時にクジをひいて順番を決める。その年最初の「初庚申はつこうしん」は縁起がよいといって、皆これに当たるのを喜ぶという。昔は徹夜で飲み食いし、料理も三品までと決まり、すべて宿で用意したものであった。しかし、現在は、仕出し屋から二千円の御膳を取り、酒代も割り勘にしている。そこには明らかに時代の変化や状況に応じ考え方にも合理性が取り込まれた影響がみられる。そうしたことは「話は庚申さんの晩」といい、賑やかに話し合い時には騒ぐ姿や状態においても認められる。また、四二・六一歳など厄年の者の家が宿になると、御膳代・酒代とも廻り宿が負担することになっている。こうしたことは佐渡に限ったことではなく、全国どここの庚申講にも見られたごく普通の当たり前の決まりであった。

閏月うるうづき（閏とは季節と暦月とを調節するため、平年より余分にもうけた暦日・暦月。地球が太陽を一周するのは三六五日五時四八分四六秒だから、その端数を積んで、太陽暦では四年に一回、二回の日数を二九日とし、太陽暦では平年を三五四日と定めているから、適当な割合で一年を一三ヶ月とする。その閏に当たる月を「閏月」という）があると、その時の庚申に庚申塚を参詣する。紅白の餅をつき塚に供え、「家内安全」と書いた柏の股塔婆を立てる。神主も呼んで、祝詞をあげてもらふ。むかしはこの日に、塚の前の玉砂利（白石）を換えたという。この後宿へもどるが、紅白の餅は参詣した子供に分け、また、帰りに会った人に縁起がよいといって分け与えた。宿にもどれば、いつもと同様に飲み食いをした。このお祀りの準備は、この日に当たった宿がすることになっている。

稲鯨の新田地区では、風呂につかって楽しむという。しかし隣村の米郷では反対で、庚申の日風呂に入ってはならないという。その訳は、庚申の日に子供を連れて風呂に入ったら、湯の中で子供を死なせてしまったことがあったからだという。

何度も繰り返す様に庚申信仰はもともと中国の道教が源であるが、我が日本の各地に普及した後、さまざまな神格が与えられている。北川内では御庚申さんは猿だといい、高瀬では、猿田彦・百姓の神であるといわれ、モノダネなむもろ（種籾）を持って天から下ったと伝えられている。

橘では、庚申たいしやくてんは帝釈天（もとインド教〈ヒンドゥー教と同じ〉の神インドラが仏教に入った

もの。別称インドラともいう)であるといい、庚申の日に天から降りて再び天へ戻るといふ。この日は掛け軸をかけ、煮しめ・うどんをつくり、お神酒を供え、「南無庚申さん」と拝んだ。帝釈天がお帰りになるまでは寝てはならないといわれ、みな世間話や魚の仕方などの話をして、夜中の十二時まで起きていたという。文字通り「話は庚申さんの晩」といわれるほど晩遅くまで起きているわけである。庚申の掛け軸は今も大切に保管され残っているが、それには帝釈天と、その使わしめの猿が描かれているという。

大浦では、東前組の渡部文右衛門家の祀る帝釈天の堂内に猿田彦が祀られており、一年の最初の庚申の日に安養寺で塔婆をつくってもらい、ここに立てるのである。

米郷では、三組の庚申講があり、それぞれ性格が異なる。それはオオガンニョウ(大庚申)・チュウガンニョウ(中庚申)・コガンニョウ(信徒祭)の三つで、オオガンニョウは親さん方(永久主^{おもだ}立ち)の一〇戸ほどが集まり、仏像の前で念仏を唱える。魚は絶対に口にしないという。チュウガンニョウは親さん方以外の田畑を所有する家が集まるが、行事内容は同様である。しかし漁師ばかり一三戸が集まるコガンニョウは「天照皇大神に道を教えた神様」と信じられている猿田彦の掛け軸をかけ、念仏のほかに祝詞をあげる。魚も必ず食べるという。三組はそれぞれ別個の庚申塚を整える。講には掛け軸のほかに、庚申の枡・袋・太鼓があり、宿の家は前の宿からこれを受け取り、その枡で講中の家から米を集めた。

参考文献

- 平野 実『庚申信仰』(角川選書)角川書店、昭和四十四年。
飯田道夫『庚申信仰——庶民宗教の実像』人文書院、平成元年。
五十嵐文蔵『庚申信仰の伝播と縁起』小学館、平成三年。
新潟県編集「第六章 信仰的講」『新潟県史』(資料編23 民俗・文化財二 民俗編Ⅱ)所収、新潟県発行、昭和五十九年。
相川町史編纂委員会編『相川の民俗1』(佐渡相川の歴史 資料集八)、(代表)秋野竹二郎、昭和六十一年。
中山徳太郎・青木重孝編『佐渡年中行事』(増補版 柳田国男序)高志書院、平成十一年 窪 徳忠『道教の世界』学生社、昭和六十二年。
窪 徳忠『庚申信仰』山川出版社、昭和三十一年。
窪 徳忠『庚申信仰の研究』(上下)原書房、昭和五十五年。
柳田国男「年中行事書」『定本柳田国男集二一』所収、筑摩書房、昭和三十七年。
宮家 準・その他編『日本宗教事典』弘文堂、平成十三年。
桜井徳太郎『民間信仰と現代社会——人間と呪術』評論社、昭和四十六年。
桜井徳太郎『民間信仰』塙書房、昭和四十九年。
堀 一郎『民間信仰』(岩波全書)岩波書店、昭和四十八年。
和歌森太郎『庶民の精神史』(日本の民俗10)河出書房新社、昭和五十一年。
田島諸介『生活の中の神事——日本人の心のふるさと』神宮館、昭和六十年。
喜田貞吉編『福神』宝文館出版、平成四年。
吉井貞俊『福の神えびすさんものがたり』戒光祥出版、平成十五年。
戒光祥出版株式会社編集部『七福神——福をさずける神々の物語』戒光祥出版、平成十四年。
佐藤達玄・金子和弘『福を呼ぶ・幸運を呼ぶ 七福神』木耳社、平成元年。
蘭田 稔・茂木 栄監修『日本の神々の事典』学習研究社、平成九年。